

第3章 水俣市の歴史文化の特性

1 歴史文化の特性

第1章・第2章で述べた本市の自然的・地理的環境、歴史の変遷や文化財の概要から、本市の歴史文化の特性を示すキーワードを抽出し、整理した結果、以下の4つの歴史文化の特性を見出すことができます。

- 1 多彩な地形が生んだ自然環境豊かなまち
- 2 自然と共に生き、再生するまち
- 3 肥後と薩摩との境界・攻防のまち
- 4 陸・川・海の道を通じるまち

(1) 多彩な地形が生んだ自然環境豊かなまち

水俣市には山・海・川があり、これらが生む様々な風景、自然環境があります。豊かな自然が作る美しい風景は、私たちの生活を豊かにし、人々を引き付けるものとなっています。

九州山地から海岸部まで迫る市域の7割を占める山地は、それらの山体を作り出した安山岩溶岩の性質から、特色ある山間部の地形を見せています。特に市の東部で鹿児島県との境付近に広がる山地は、平坦な山頂が広がる独特の眺望となっています。また、滝がかかるのもこの溶岩がなす地形の特徴で、湯出には滝が分布しています。

八代海に面した海岸部は、入り江が連なるリアス海岸、海岸段丘、大きな湾があり、変化に富んでいます。また、対岸にある恋路島や明神の岬が、自然の防波堤となり良港を生んでいます。海岸部、山間部それぞれに温泉があります。

水俣川は源流から海に注ぐまで水俣市域で完結し、山から海への一体的なつながりを見ることができます。また市の南側に源流を発する湯出川と古くから合流、分流を繰り返す、その形状は、本市の名前の由来となっています。川は河岸段丘や、洲を作り出しました。

水俣市ではこれらの地形のもとに育まれた豊かな自然環境があります。石飛や無田には湿原があり、湿地帯特有の植生が見られます。海岸部は港湾整備なども行われていますが、湯の児海岸や袋海岸、恋路島などは自然の状態が保たれ、ヘゴやキイレットトリモチなどの希少種が見られます。芦北町と境を接する山間地では、国指定天然記念物「ヤマネ」の生育も確認されています。

豊かな自然が育まれる一方で、耕地が少ないなど営農には厳しい地形のため、林業と漁業も本市を支えてきました。農業では近代以降も農地改良など努力が続けられた結果、地形を生かして栽培するお茶や柑橘類のブランド化に成功しています。水田耕作の裏作にする試みで植えられ始めた玉ねぎは、化学肥料や化学農薬を抑えた「サラダたまねぎ」が人気を博しています。

また本市では環境汚染の苦境を乗り越えて取り戻された自然があるのも特徴です。埋立てや、漁獲禁止を経た海では、ヒメタツなど様々な生きものが生息しています。また、自然とつながるアクティビティも豊富です。

(2) 自然と共に生き、再生するまち

水俣市には、旧石器時代から人々が暮らし、多くの遺跡が確認されています。縄文時代

の南福寺貝塚、弥生時代の初野貝塚のように、豊富な海の恵みを楽しむ暮らしもありました。また、北園上野古墳群からは、当時その地域に有力な首長層を生むコミュニティが作られていたことが想像されます。

土地面積の7割が山地の本市は、地形の制約を受ける環境で、江戸時代初めの記録によれば決して豊かな土地ではありませんでした。営農のため山腹を拓き棚田を作り、平地を広げ田畑にし、取水施設を整備し、また旧久木野村のように共同で採草地や山林を管理し、互いの生活を支え、自然に敬意を払いながら生活してきました。各所にある水路や耕地の開発記念碑、水神や田の神、山神、民俗芸能がそれを物語っています。

新しい産業として定着したものに、熊本藩の財政政策で始められた製塩やハゼ栽培がありました。本市の塩は葛で編んだ俵に入れることで適度な湿度で保たれるため特産物となりました。江戸時代には藩に上納していましたが、明治時代には長崎県島原市の素麺製造に需要があり海から積み出されたほか、出水や伊佐には陸路で運ばれ、人々の貴重な現金収入源となっていました。

明治41年(1908)、化学肥料や化学製品を製造する日本窒素肥料株式会社(現在のJNC株式会社)が進出したことによって、近代都市水俣が幕を開けました。塩田跡は工場用地となり、河川改修、港湾や道路などのインフラの整備が進み、急速に近代化しました。本市は国際的な港湾都市としての歩みを進めようとするのですが、工場排水によって水俣病が発生し、人間を始めとする様々な生命と環境に大きな影響が及びました。

そのため本市では、環境再生へ向けて様々な取組が行われてきました。水俣市立水俣病資料館は、水俣病問題の教訓を後世に伝えるため、資料を収集・保管・展示し環境問題への情報発信を行っています。市は、環境産業を誘致するなど、SDGsの実現を目指しています。市民の生活の中では、ごみの高度分別が定着し、また、市民は「水俣病の教訓」を継承していくべきものとして認識しています。

海に蓄積された水銀を含む汚泥を封じ込めた埋立地は、健康と環境をテーマとしたエコパーク水俣として、水俣の海と川の風景を表現した「竹林園」、人と海の親近性を高めるデザインの「親水護岸」が整備され、多くの人々が訪れる場所となっています。水俣港は、新しい環境関連産業などを支える港湾機能の充実を目指しています。

(3) 肥後と薩摩との境界・攻防のまち

水俣市は、旧石器時代から他地域との交流があったことがわかっています。

古墳時代には、遺構・遺物から南九州の特徴、北九州の特徴がともに確認できるようになり、古くから文化の交わる土地でした。

奈良時代になると、律令制の導入によって設置された地区区分「令制国」のなかで、水俣は「肥後国」と呼ばれる地域と、「薩摩国」と呼ばれる地域の境界に接することになりました。

境界の土地は、文化の交流点となると同時に、争いが多く起こる場所でもありました。室町時代、各勢力が領地を争う時代が到来すると、肥後と薩摩の境に立地する本市は、戦いにさらされました。薩摩との防衛線を張るように、防御のための山城は東西の線上に並んでいます。相良氏が人吉・球磨、葦北、八代を領する戦国大名になると、本市は、16世紀中頃から出水や伊佐方面からの侵攻が、頻発化及び長期化していました。

「秋風にみなまた落つる木の葉かな」「寄せては沈む月の浦波」

この連歌は、水俣城の戦いの折に、攻め手側の島津しまづと相良の間で交わされたものです。「寄せては沈む月の浦波」は、相良が、島津が波のように攻めては退くと擲揄やゆしたのと思われますが、係争けいそうが波のように繰り返された本市の様子をよく表している歌です。

島津氏は南九州を統一したのち、本市の東部から侵攻し、天正9年（1581）には水俣城を大軍で囲みます。この戦いで水俣城が落城したことで、相良氏は葦北・八代を一気に失いました。

豊臣秀吉の九州平定後、秀吉は相良家の重臣深水宗方ふかみそうほうを国の「さかいめ」を決めるため呼び出すとともに、水俣を直轄地とし、深水宗方に水俣城代として境目の管理を任せました。このことは、本市が境界の定まらない不安定な場所だったことを示しています。

関ヶ原の戦いの時、九州でも黒田・加藤らの東軍と、島津・小西らの西軍が戦いました。本市には加藤清正が島津氏と戦うため南下し、出水との間で向き合い緊張状態が続きました。その後、熊本藩主になった清正は水俣城を堅牢な城に改修しました。

加藤氏の改易後、藩主になった細川氏の時代となっても、本市には、鉄砲が多く配置され、また水軍も編成されるなど、薩摩藩を警戒するため軍事的に重要な地点でした。特に薩摩と接する袋方面には番所が密に設置されました。また、川も、橋をかけず歩いて渡るようにするなど、防御の一端を担っていました。一方で薩摩側も領内に入ろうとする人物の警備が厳しく、関所を越えられず水俣に戻る人もあり、互いに領内を厳しく守ろうとする地であったと思われます。また、浄土真宗が禁制だった薩摩側から本市の浄土真宗の寺に信仰を求めて来る人々もいました。

明治10年（1877）の西南戦争では、伊佐が薩軍の重要拠点となったことから、官軍にとって伊佐市・出水市と接する本市が重要な拠点となり、久木野、石坂川、深川、鬼岳、大関山などの山間地、市街地に迫る中尾山などで激しい戦いが繰り返されました。戦後、伊佐・山野方面の官軍戦死者の墓地「陣内官軍墓地」が建立され、熊本県の史跡となっています。

明治16年（1883）、本市と出水市の境を流れる小さな河川である境川さかいがわに架けられた石橋は、境目としての攻防に対する緊張がようやく解けたことを表しているかのようです。

（4）陸・川・海の道が通じるまち

水俣市は山地の標高が低く傾斜が緩やかなことから道が通じやすく、また海に開けていることで、東西南北に道が通じています。東西は海岸部・河口から山間地を結び、南では鹿児島県に接します。西側には港もあります。人々の交流の歴史は古く、旧石器時代の石飛遺跡いしとびでは、身近こくようせきに黒曜石産地があるにも関わらず、長崎や佐賀の黒曜石が持ち込まれています。

古墳時代には、墳墓や住居などに強い南九州の特色があり、土器には南北の特徴を取り入れたものがあるなど、北と南の文化が交わる土地であったと考えられます。

古代には、律令政府が整備した官道が、市域の西部と内陸部を南北にそれぞれ通過し、「水俣駅」、「仁主駅（読みは不明）」が置かれ交通の要所になりました。

江戸時代には、出水に至る薩摩街道、伊佐に至る大口街道、芦北から久木野を通り、伊佐に至る大隅街道がありました。街道は薩摩街道のように島津氏の参勤交代道として使用されるほか、人々や物資が行き交うため、街道沿いの要所には番所が置かれました。これらの道は西南戦争の進軍路としても活用されたと思われ、周辺に激戦地が分布します。

津奈木町つなぎ以北では急峻な峠を避けるため、陸路だけでなく船も多用されており、昭和初

期に港湾が整備されるまでは、水俣川と湯出川に挟まれた中州に立地した浜町が物資輸送と人流の拠点として発達していました。米、ハゼの実、塩、内陸部で産する材木などが積み出され、明治時代には伊佐市の金山の動力源である石炭が河口の港から陸揚げされ、県道を使い馬車で運ばれていました。明治40年（1907）に伊佐市の金山へ電力を供給するための曾木発電所が建設されるまで続き、道中は、宿や休憩所があり賑わいました。明治41年（1908）には、海運と対岸の天草の石灰岩が入手しやすいことからカーバイト工場が河口部の古賀町に立地しました。

明治・大正から昭和初期にかけて、河川改修、国道・県道、鉄道や港の整備が行われ、水俣川河口に代わる百間港^{ひやつけん}の整備が継続的に行われ、国際貿易港に指定されました。

鉄道では、市域の西部を通過する旧鹿児島本線（現肥薩おれんじ鉄道^{ひさつ}）が整備されたのち、水俣駅から市の東部を通過し伊佐市山野^{やまの}に至る山野線が開通し、昭和63年（1988）に山野線が廃止となるまでの50年間は、本市は東西南北に鉄道が通じるまちとなりました。

古くから町場となっていたことで、浜町には、多くの文化人が訪れました。浜町に根差していた徳富家は、彼らと交流し、交流で生まれた文教の気運や教育を重んじる家風は徳富一敬・蘇峰^{かずたか}・蘆花を生み出しました。蘇峰・蘆花が幼少期を過ごした家は、商業の町としての浜町の象徴でもあります。徳富蘇峰は、頻繁に水俣を訪れて市民と交流し、蘇峰の寄付をもとに建設された図書館など、多くのゆかりの地が遺されています。

表 13 「歴史文化の特性」の概略

1 多彩な地形が生んだ自然環境豊かなまち
水俣市には海・山・川があり、これらが生む様々な風景、自然環境があります。豊かな自然が作る美しい風景は、私たちの生活を豊かにし、人々を惹きつけ、自然と触れ合うアクティビティも豊富です。
2 自然と共に生き、再生するまち
水俣市には古くから人々が暮らしていましたが、地形的に稲作が難しいため、地形の開削などを行いこれに立ち向かいつつ、自然に敬意を払い生活してきました。近代に進出した工場により急速に発展しましたが、公害が発生し、そのため環境再生へ向けた有形無形の様々な取組が行われています。
3 肥後と薩摩との境界・攻防のまち
水俣市は九州の北と南の文化の混ざり合う交流点でしたが、肥後と薩摩との国境になって以降、境界特有の宿命を負うことになりました。戦国時代には戦いにさらされ、江戸時代も肥後の防波堤的役割を担いました。そして日本最後の内乱西南戦争でも県境一帯を中心に激戦地となりました。
4 陸・川・海の道が通じるまち
水俣市は山地の標高が低く傾斜が緩やかで、また海に向けた交通の要衝です。人や物資の往来は旧石器時代から確認されます。近代以降は港湾や鉄道の整備が進みました。往来の道は時に戦の道ともなりましたが、物流の拠点に町場が栄え、多くの文化人が訪れたことから、徳富蘇峰・蘆花をはじめとした偉人を生む土壌が育まれました。

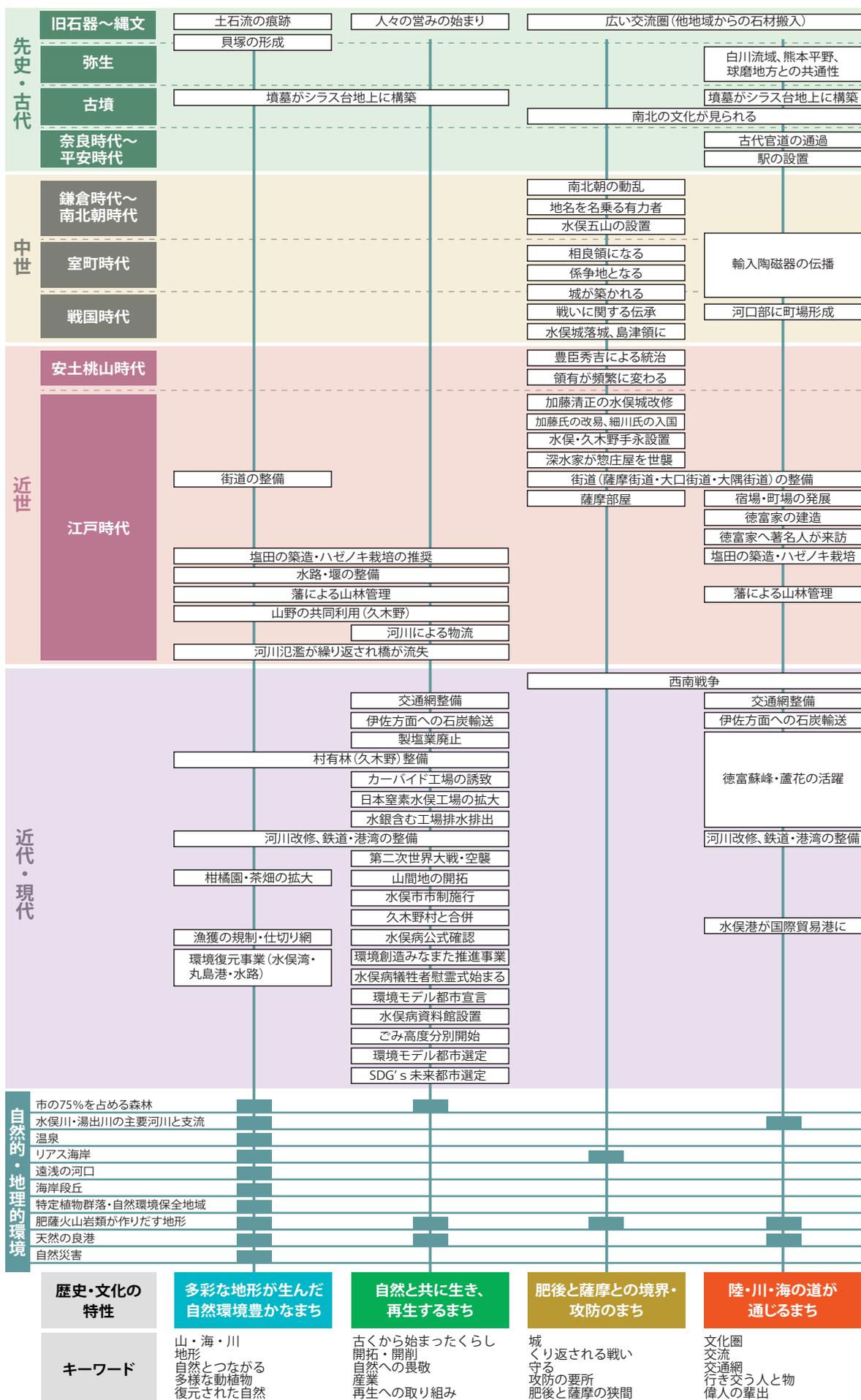


図20 本市の様々な事象と「歴史文化の特性」との関連

